

中迫地下式横穴墓群

平成7年4月

綾町教育委員会

中迫地下式横穴墓群

平成7年4月

綾町教育委員会

序

「私たちの郷土綾町には、いつ頃からどこに人が住みついたのであろうか」今までに判明したところでは、綾北川と綾南川の間、陵岬状に突き出た洪積期丘陵台地の一角、割付・尾立地域に古い頃から人々の住んでいたと思われる跡があります。

郷土綾町の歴史をふりかえってみる時、これらの遺跡は郷土文化の黎明を告げる重要な処であります。

本書は、耕作中に陥没した畑地を、平成元年に町教育委員会が実施した中迫地下式横穴群発掘調査の報告書です。

今回の調査では、古墳時代の三基の地下式横穴墓が検出され、地下式横穴では極めて稀な例である竪坑の切り合いが一号と三号で確認されました。調査された三基がそれぞれ平入りタイプと妻入りタイプであり、山間部と平野部の特徴の境界や現在仮説が出されている妻入りタイプから平入りタイプへの変遷を知る上で貴重な資料を得ることができました。

本事業の実施にあたり、ご指導、ご援助いただきました県教育委員会、各関係機関、町民各位に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が、文化財保護思想の啓発のための資料として役立つことを念願するとともに、町民各位の文化財保護行政に対するご理解とご協力をお願いする次第です。

平成7年8月

綾町教育委員会

教育長 猪野昭男

例 言

1. この報告は綾町教育委員会が主体となり実施した、中迫地下式横穴墓群の発掘調査報告である。
2. 本書に使用した位置図は、綾町役場が作成している「綾町全図」(1/25,000)を元に作成した。周辺地形図は綾町役場が作成している都市計画図(1/1,000)を元に作成した。
3. 現地での図面は、宮崎県教育委員会文化課北郷泰道、同長友郁子が作成した。
4. 遺物・図面の整理は、宮崎県埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測・拓本等は長友郁子が整理補助員の協力を得ながら行った。
5. 本書に使用した写真は北郷が撮影した。
6. 原稿の執筆は北郷・長友の共同討議を経て、分担執筆としたが、第1章第1節調査にいたる経緯を北郷が、それ以外を長友が執筆した。編集は長友が行った。
7. 遺物は宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターに保管されている。

本文目次

第I章	はじめに	1
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	調査の組織	1
第3節	遺跡の位置と環境	1
第II章	調査の成果	3
第1節	調査の概要	3
第2節	調査の結果	3
第III章	まとめ	12

挿図目次

第1図	中迫地下式横穴墓群の位置と周辺遺跡	2
第2図	中迫地下式横穴墓群周辺地形図	4
第3図	中迫地下式横穴墓群遺構配置図	6
第4図	1号・3号地下式横穴墓実測図	7
第5図	1号地下式横穴墓出土遺物実測図	8
第6図	2号地下式横穴墓実測図	9
第7図	2号地下式横穴墓出土遺物実測図	11

図版目次

図版1	遺跡近景	13
	1号地下式横穴墓竪抗羨門	13
	1号地下式横穴墓閉塞状況	13
	1号地下式横穴墓玄室羨門	14
	1号地下式横穴墓人骨出土状況	14
	1号地下式横穴墓内出土玉	14
	1号地下式横穴墓内出土遺物	15
	2号地下式横穴墓内出土遺物	16

第Ⅰ章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

綾町大字北俣字中迫の畑地において、ゴボウトレンチャーによる深耕中陥没が生じたとの連絡が綾町教育委員会になされ、町教育委員会において現地を確認したところ地下式横穴墓の可能性が高いとの報告が県教育委員会になされた。陥没の箇所は2箇所確認され、天井部が陥没していることから遺構の現状保存は困難であり、被葬人骨および副葬品への影響も考えられることから平成元年6月7日から同月12日までの間、県教育委員会文化課主任主事北郷泰道と主事長友郁子の担当で緊急発掘調査を実施した。

第2節 調査の組織

中迫地下式横穴墓群発掘調査の組織は、次のとおりである。

調査主体 綾町教育委員会

教育長 猪野昭男

教育課長 岡元 洋

特別調査員 松下孝幸（長崎大学医学部第2解剖学教室助教授）

分部哲昭（長崎大学医学部第2解剖学教室講師）

調査担当 北郷泰道（宮崎県教育委員会文化課埋蔵文化財係）

長友郁子（宮崎県教育委員会文化課埋蔵文化財係）

第3節 遺跡の位置と環境

中迫地下式横穴墓群は、宮崎県東諸県郡綾町大字北俣字中迫に所在する遺跡である。綾町は県庁所在地に宮崎市から北西に約18kmの位置にあり、大淀川の支流の綾北川、綾南川により開かれた平地に町の中心が位置する。町の大部分は九州山地で占められており、照葉樹林がよく発達している。遺跡はこの急峻な山地の裾野に所在し、標高約236mを計る。遺跡が所在する場所は比較的傾斜の緩やかな台地状の部分である。地下式横穴墓群は台地としては最も高い所にあり、細かく刻まれた谷が入る細い舌状台地の縁辺部に所在する。

近辺の遺跡は、中迫地下式横穴墓群から約300m東へ行つたところに縄文時代後期の遺跡の尾立遺跡がある。尾立遺跡は傾斜の緩やかな台地の縁辺部にあり、深い谷が迫っている。遺跡地図上ではこの遺跡以外には遺跡が見られないが、実際に現地を歩いてみると多くの縄文土器片を広い範囲で拾うことができるので、今後遺跡群詳細分布調査が行われれば多くの遺跡が発見されこの台地の歴史的環境も明らかになることであろう。



1. 中迫地下式横穴墓群 2. 尾立遺跡 3. 北別府遺跡

第1図 中迫地下式横穴墓群の位置と周辺遺跡

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査の概要

中迫地下式横穴墓群の調査は平成元年6月7日～平成元年6月12日までの間行われた。発掘調査は耕作中陥没した2基（1号・2号）のみを対象として行われたが、調査の結果当初その存在が予想されなかった3号地下式横穴墓が発見され、1号地下式横穴墓の竪坑道が3号地下式横穴墓の竪坑を切っているのが確認された。1号地下式横穴墓は平入り羨門部石閉塞で直刀・鉄斧・U字形鋤先・貝輪各1、鉄鏃2、平玉多数、人骨1体が出土した。2号地下式横穴墓は妻入り羨門部カシワバンプロック閉塞、直刀・鉄鏃・刀子各1が出土した。3号地下式横穴墓は、小型で平入りのもので1号地下式横穴墓に竪坑を切られていた。玄室内から朱玉が出土した。

第2節 調査の結果

1号

遺構（第4図）

1号地下式横穴墓は、平入りで羨門部石閉塞である。閉塞には大きな偏平な河原石を用いる。天井部は耕作中に陥没したために部分的に崩壊しているが切り妻造りであることが確認された。玄室は長方形を呈し、両袖を有する。袖状部分は左右の長さが違い、東側1m30cm 西側91cmを計る。玄室の平面形は、丸みをおびた長方形で幅2m91cm、奥行き1m7cmを計る。また、棚状施設が玄室奥壁から西壁・南壁西側にかけて作られているのが確認された。玄室東壁は棚状施設部分が崩壊しており、一部棚状施設の痕跡が確認されたので、棚状施設は玄室の壁面を取り巻いていたと考えられる。しかし、棚状施設の上に遺物はなく、遺物は床面に横たえられた人骨の脇に置かれていた。羨門は縦長の長方形を呈するが、やや幅広な形である。高さ57cmを計る。羨道はしつかりしており、長さ43cmを計る。羨道は竪坑から玄室に向けてわずかに傾斜している。その比高差は、15cmである。竪坑の上場は削平のためはつきりしないが、下場は左右が不揃いで、西側が若干外側へ広がっている。東側は、しつかりした方形を呈する。閉塞石の積み方は、大型の偏平は石を用いている。

遺物（第5図）

1は柄部分を欠くが、全長60cmを計る大型の直刀である。全体に鞘の木質が良く残っており、鞘部は、全体に組み紐巻きの上に平織り布を巻いている。先端部は腐食のため欠損している。柄部は調査中に紛失したが、出土時には鹿角装が施されていたので、1m近い長さであった。この直刀は県内出土の古墳時代直刀の中でも特に大型の部類に入らる。2は、変形圭頭鏃が2点錆着したものである。2-Aは、身長12.9cm、身幅3.9cmを計る。2-Bは、身長10.8cm、身幅3.5cmを計る。いずれも茎部は偏平で、矢柄はほとんど遺存していない。全体的に錆化が激しいが、2-Bの一部錆落としをしたところから



第2图 中迫地下式横穴墓群周边地形图 (1/2500)

樹皮巻が確認された。2-A・2-B共に茎部に線刻は見られない。3は、U字形鋤先である。全長9.8cm、幅12.8cm、厚さ0.2cmを計る。全体的に錆化が激しく大きく錆で膨らんだところが見られるが、先端部分の遺存状況は良好である。内面の挟り部分の深さは0.3cmを計る。内部は袋状になっており、鉄部の厚さは0.37cmである。4は、鉄斧である。全長10.4cm、刃部幅5.25cm、袋状部径2.2cm、短径1.5cmを計る。袋状部の内部には、木質が付着しているが遺存状況はきわめて悪い。鉄部も全体的に錆化が激しく、刃部左上に大きな瘤錆が見られる。袋状部の裏側には柄を装着するために鉄部に切れ込みが施されており、隙間が開いている。5は、イモガイ製貝輪である。人骨の左腕に装着された状態で出土したが、玄室の床にふれていた部分は失われている。表面は茶褐色の付着物が覆っており、上腕部側は風化が激しく所々崩壊している。しかし、遺存部分を観察すると素材となるイモガイを丁寧に輪切りにした後ヤスリ状のものを用いて形を整えている。6は、土師器の高坏片である。器壁は風化が激しく胎土に含まれている粒々が浮きでている。竪坑の土層図中にその位置が示してある遺物である。7は、竪坑埋土中から出土した剥片である。石材は頁岩を用いており、旧石器時代の遺物の可能性が考えられる。剥片の長さ4.3cm、幅3.9cm、厚み0.8cmの比較的厚みのあるノの字状剥片である。遺跡の所在地が高い台地の上であることから、同じ場所に旧石器時代の遺跡の所在が考えられる。8は、人骨の腰骨の下から9～14と共に出土した玉である。石材はいずれも滑石で同一母岩から造られたと考えられる。出土時はバラバラの状態であったが、副葬された時には腰飾りであったと考えられる。玉の出土総数は、9～14のような平玉が361個、8のペンダントヘッド状のものが1個の362個である。8は外の平玉が丁寧に成形されているのに比べ荒割されただけで穿孔されて製品とされている点が注目される。制作途中に被葬者が死亡したためか？それとも最初から意図されて造られたものなのかは不明である。

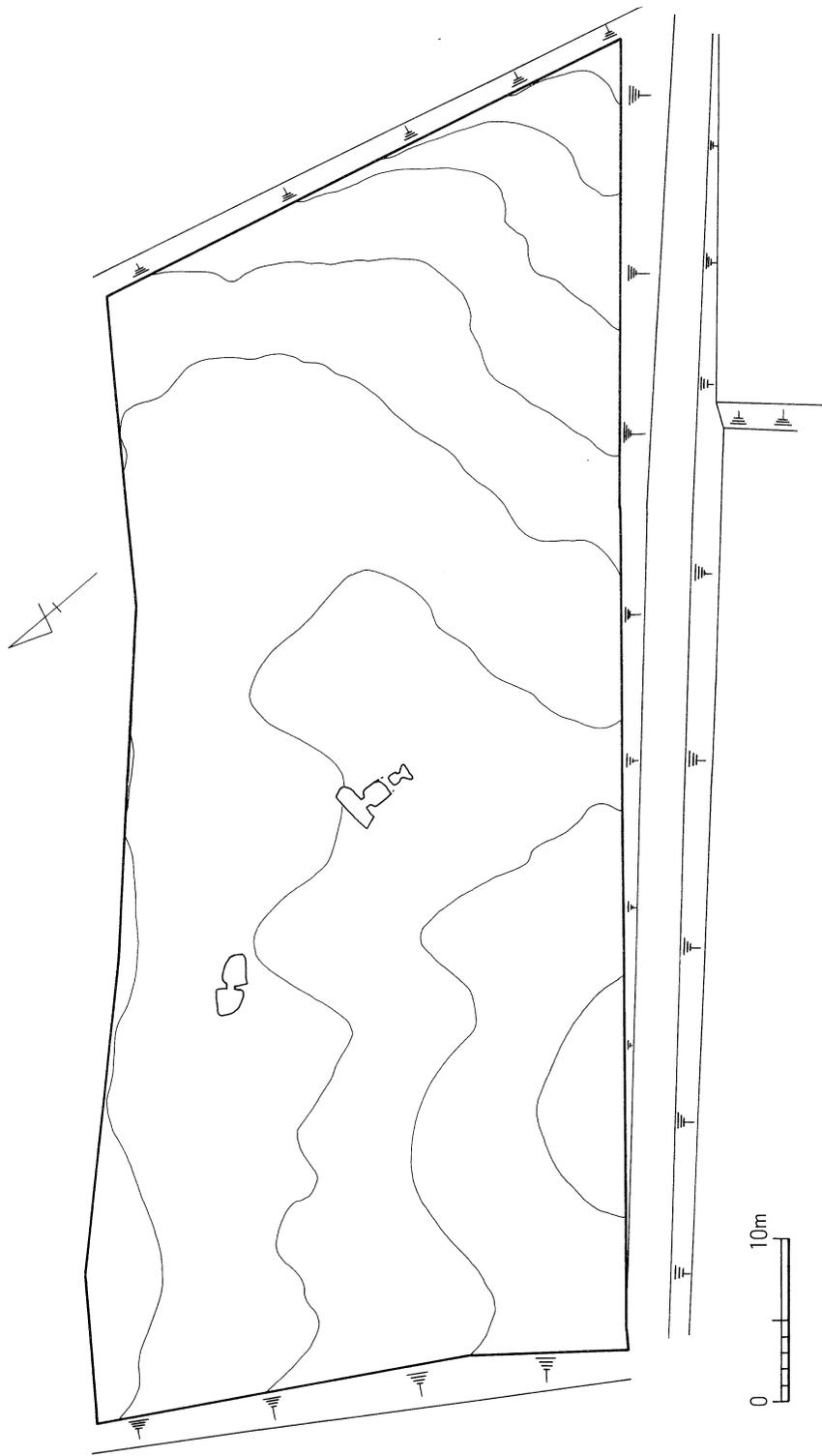
人骨の出土状況について

1号地下式横穴墓からは、遺存状況の悪い人骨が1体分出土している。人骨は成人女性で頭を玄室の左に向けて横たわっていた。左腕にイモガイ製の貝輪を1点装着していた。また、腰骨の下から玉類が出土したので腰飾りを装着していたと考えられる。また、副葬されていた直刀も1m近い大型のもので、柄部には鹿角装が装着されていたが調査中に紛失した。

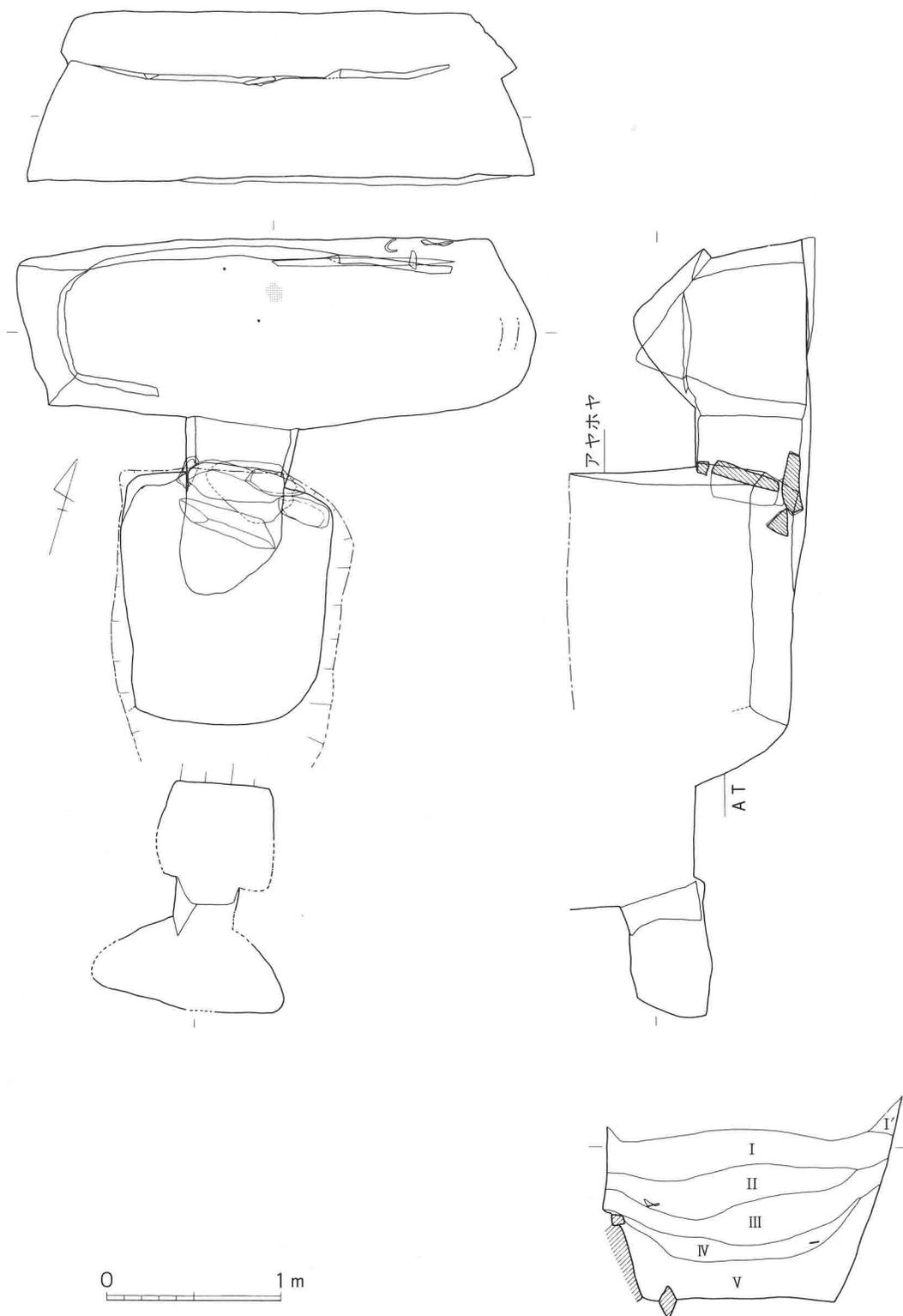
2号

遺構（第6図）

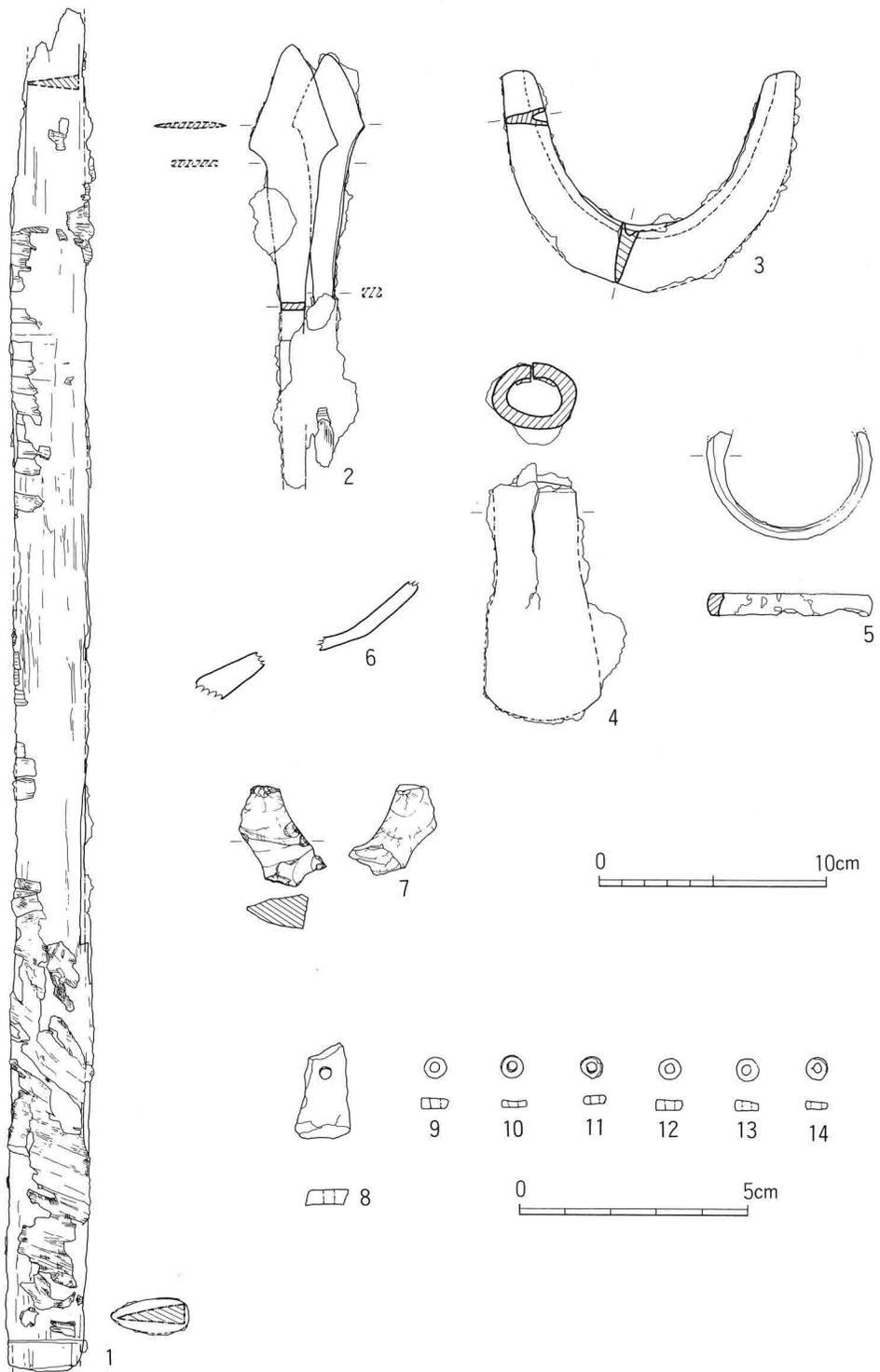
2号地下式横穴墓は妻入りで両袖を有する。天井部は崩壊しているため形状が不明であるが、わずかに残された部分から推定すると、寄せ棟造りであった可能性が考えられる。玄室の平面形は玄室の奥壁側が丸みをおびている。砲弾形を呈する。玄室は幅1m49cm、奥行き1m97cmを計る。棚状施設の幅は極めて狭く、約1～4cmしかなく、玄室の左側から羨門部左側にかけて崩壊している。玄室内部には幅5cm程度の工具痕が見られる。工具痕は天井部から壁面まで全面に及んでおり、上から下へ、天井部はほぼ垂直に、壁面は右側壁の羨門より3/4が右斜め下に向かつており、残りの奥壁より部分1/4が左斜め



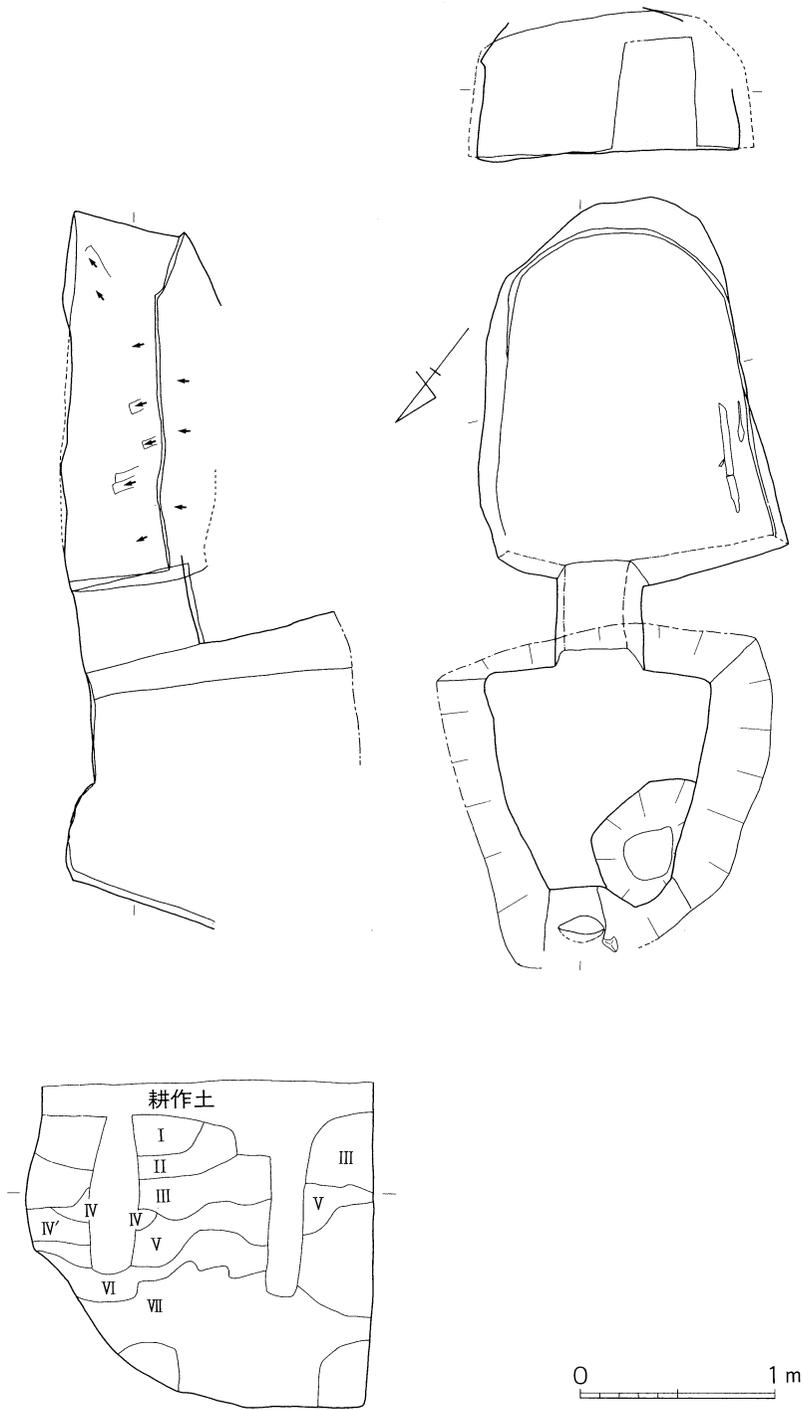
第3図 中迫地下式横穴墓群遺構配置図



第4図 1号、3号地下式横穴墓実測図



第5图 第1号地下式横穴墓出土遺物実測図



第6図 2号地下式横穴墓実測図

下に向かって施されている。羨門は長方形を呈する。羨門部の床は幅45cm、天井部34cm、羨道の長さ44cmを計る。竪坑は玄室側の方が長い台形状を呈する。竪坑の端の壁面には24cm、奥行き13cmの足かけ穴が1個見られる。また、竪坑右隅には直径60cm、深さ14cmの窪みが見られる。遺物は直刀・鉄鏃・刀子各1点で玄室右側の壁際に置かれていた。

遺物（第7図）

1は全長39cmの中型の剣である。全体的に銹化が激しく木質部の遺存状況もあまり良くはない。柄部から全長の1/4程度のところで折れている。柄部の端には別の鉄鏃の莖部が銹着している。2の鉄鏃と同一個体かどうかは不明である。2は変形圭頭鏃である。莖部の途中で折れていることと、刃部の最大幅部分に瘤錆があることから全長ならびに身幅の計測が不可能である。莖部は扁平で下部に樹皮巻が見られる。全体的に銹化が激しく鏃身部や莖部に大きな瘤錆が見られる。鏃身部は変形圭頭鏃といっても三角形鏃に近い形状を呈している。3は小型の刀子である。全長10.3cm、刃部長6.6cm、関部幅1.9cm刃部厚さ0.28cmを計る。この刀子も銹化が激しく全体的に瘤錆が浮きでている。刃部の芒近くに布痕が付着している。布痕の付着は少ないので布の詳しい情報は得られないが、平織りの布であると考えられる。柄部には木質の痕跡が見られる。

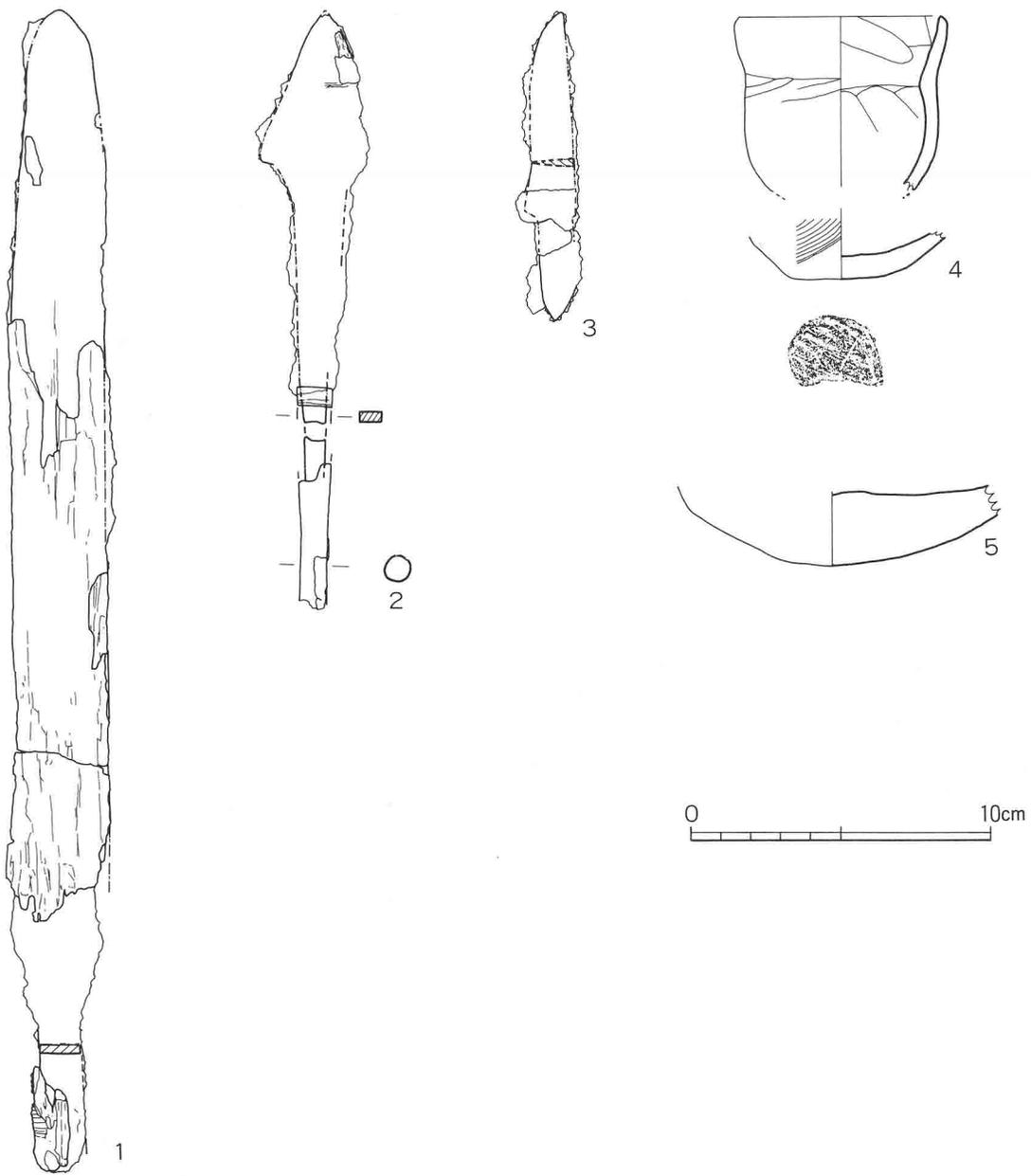
3号（第4図）

遺構

3号地下式横穴墓は竪坑部分で1号地下式横穴墓の竪坑と切りあっているきわめて珍しい例である。竪坑の深さ72cm、羨門の幅36cm、高さ48cm、羨道の長さ24cm、玄室の幅110cm程度（トレンチャーによる破壊のため正確な数値は計測不可能）、奥行き54cm、高さ47cmを計る。地下式横穴墓の玄室の平面形は両袖を有し、くずれた三角形を呈し、中央部と右端部分がトレンチャーにより破壊されている。天井部はドーム状を呈する。規模は普通の地下式横穴墓に比べ小型で、竪坑の深さも浅い。極めて小規模の地下式横穴墓である。閉塞は施されていなかった。また、板閉塞に用いられる細い溝も羨門部の床面には見られなかった。調査時にその存在が予想されなかったため土層断面図の作成が出来なかった。土層断面による1号地下式横穴墓との切り合い関係の観察はできなかった。しかし、調査時の所見から1号の竪坑が3号の竪坑を切つていると考えられる。埋土は柔らかな黒色土がフワフワの状態で充満していた。そしてその中にトレンチャーで破壊されたと思われる朱玉のかけらが多く含まれていた。朱玉のかけらは浮いた状態で出土した。出土遺物は、破壊された朱玉以外には見られなかった。

遺構外出土遺物（第7図4～5）

第7図4は地下式横穴墓周辺で表採された小型丸底壺である。底部にタタキが施されている。胴部の調整はハケメによって行われている。胴部の張りは弱く、頸部から口縁部にかけて緩やかな張りを持つ。口縁端部は丁寧なヨコナデが施されている。口唇部は比較的平坦に仕上げられている。頸部のくびれ部の下にはへら状工具による押さえ痕が見られる。胴部と口縁部の内面には指押さえ痕があり、それ以外にはナデが施されている。5は、土



第7图 2号地下式横穴墓出土遺物実測図

師器の壺の底部である。外面はナデが施されており、その上に所々にヘラ状工具痕が見られる。内面にはヘラ状工具による圧痕がある。4・5の外に薄手の丹塗り椀の破片が表採されている。いずれも地下式横穴墓に供献されたものと考えられる。

第Ⅲ章 まとめ

1号地下式横穴墓と3号地下式横穴墓の関係については、調査時には主軸が1号地下式横穴墓とほぼ同じであることから3号地下式横穴墓を作り替えたか、1号地下式横穴墓の被葬者が女性であることから3号地下式横穴墓の被葬者は1号地下式横穴墓の被葬者の子供の可能性が考えられたが、実測図を作成した後に検討を加えた結果、主軸はずれておりその可能性は低いと考えられる。このことは県内で調査された約300基の地下式横穴墓の中でもきわめて珍しい2基切り合いを示している。地下式横穴墓で切り合いが確認されたのは昭和43年に調査された東諸県郡国富町大字深年市の瀬の市の瀬地下式横穴墓群で2号地下式横穴墓と3号地下式横穴墓が玄室部分で切り合っており、壁に穴が開いていた例が1例確認されているだけである。何故多くの地下式横穴墓は切り合うことなく掘られたのか、何故中迫地下式横穴墓群1号地下式横穴墓と3号地下式横穴墓と、市の瀬地下式横穴墓群2号地下式横穴墓と3号地下式横穴墓だけが切り合ったのか明確な答えを出すのは現時点では不可能である。

中迫地下式横穴墓群の営まれた時期に関しては、全ての地下式横穴墓を調査していないので不明であるが、調査された1号～3号については遺構の平面形と出土遺物の構成から1号地下式横穴墓は6世紀前半、2号地下式横穴墓は5世紀末あたりと考えられる。3号地下式横穴墓は平入りタイプで1号地下式横穴墓に竪坑を切られていることから、2号より新しく1号よりも古いと考えられる。



遺跡近景



1号地下式横穴墓
竖坑羨門



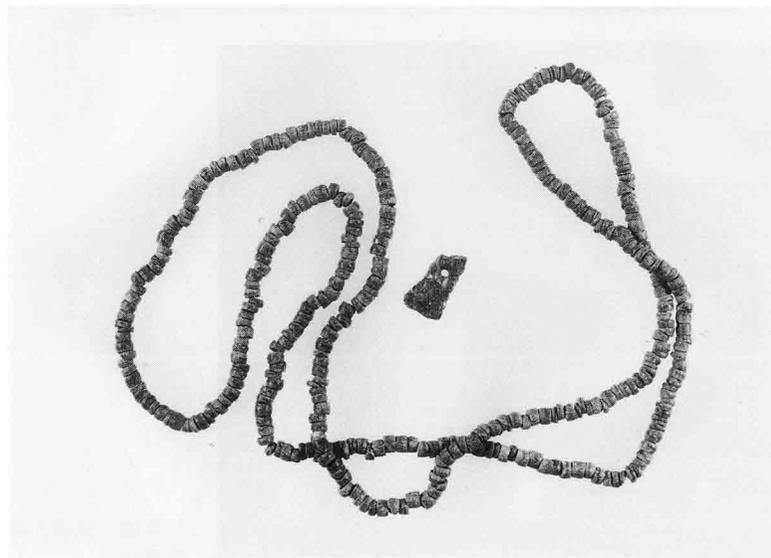
1号地下式横穴墓
閉塞狀況



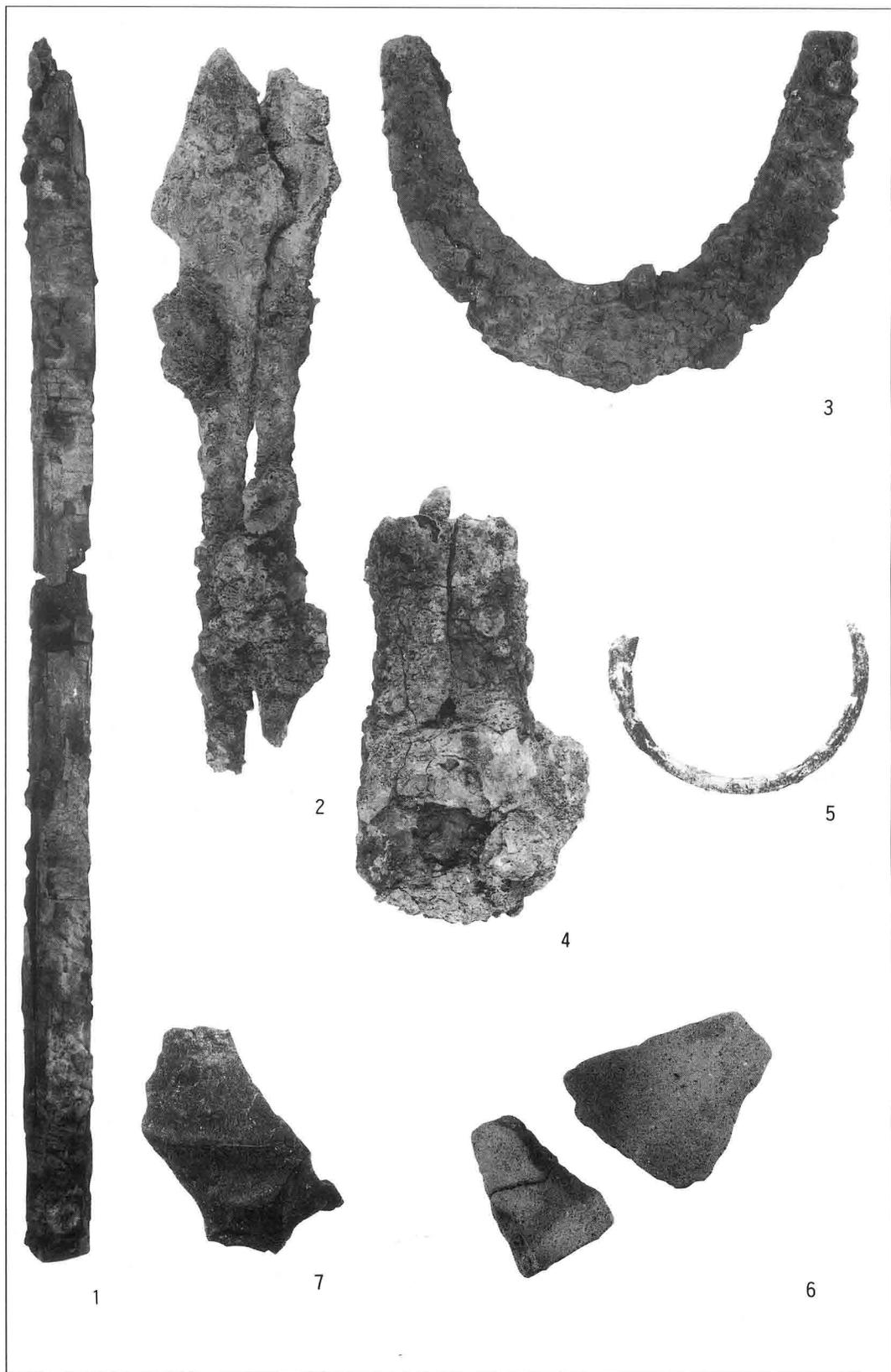
1号地下式横穴墓
玄室羨門



1号地下式横穴墓
人骨出土状况



1号地下式横穴墓
内出土玉



1号地下式横穴墓内出土遺物



2号地下式横穴墓内出土遺物

中迫地下式横穴墓群

発行 綾町教育委員会
編集 宮崎県文化課

